シャーキャ・チョクデン中観思想の研究

（要約）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D176476
氏名：彭毛才旦

1 論文の目的と方法

本研究は、15 世紀にチベットで活躍したサキャ派の学僧シャーキャ・チョクデンの中観思想の特徴とその独自点を明らかにするものである。シャーキャ・チョクデンの中観関連の著作がいくつか残されている。すなわち、『中観史・如意須弥山』(*Dbu ma'i byung tshul rnam par bshad pa'i gtam yid bzhin lhun po*)、『梗概小論』(*Ston thun chung ba dbang po'i rdo rje*)、『「根本中頌」注釈・有縁者の桟橋』(*Dbu ma rtsa ba'i rnam bshad skal bzang 'jug ngogs*)、『「入中論」注・了義の要点の注』(*Dbu 'jug rnam bshad nges don gnad kyi ṭīka*)、『「入中論」におけるいくつかの要点の説明』(*Dbu 'jug dka' gnas 'ga' zhig bshad pa ku mud phreng mdzes*)、『中観決択の宝庫』(*Dbu ma rnam par nges pa'i bang mdzod*) などである。

本研究では、シャーキャ・チョクデンの中観思想の特徴とその独自点を『中観決択の宝庫』（以下『中観決択』）に基づいて解明する。その際、シャーキャ・チョクデンによって引用されるナーガールジュナ、バーヴィヴェーカ(Bhāviveka: ca. 490–570)、アヴァローキタヴラタ(Avalokitavrata: 8th cent.)、チャンドラキールティ、ジュニャーナガルバ(Jñānagarbha: ca. 700–760)、シャーンタラクシタ(Śāntarakṣita: ca. 725–788)などが著したインド仏教文献を検討することにより、彼の中観思想の特色と独自性を明らかにする。さらに、シャーキャ・チョクデンが批判対象とするゲルク派中観思想を、シャーキャ・チョクデンの視点から検討し、その問題点を明らかにする。

2 論文の構成

本論文は「序論」「第Ⅰ部・本論」「第Ⅱ部・附論」より構成される。「本論」は全 4 章及び結論から、「附論」は翻訳研究からなる。序論では、チベット仏教史の概要、チベット中観思想の分類、シャーキャ・チョクデンの事績及び学派帰属の問題、『中観決択』の概要、『中観決択』第二章の内容構成について詳説し、シャーキャ・チョクデン中観思想に関する先行研究を批判的に概観した上で研究の目的と方法を提示した。

3 各章の概観

本論文の内容は以下の通りである。

第 1 章「シャーキャ・チョクデンによる中観派分類」 第 1 章では、チベット仏教の観点から中観派の思想的展開について考察した。

第 1 節「初期カダム派・ゲルク派による中観派分類」で明らかにしたように、カダム派ションヌ・チャンチュプが中観派を「根本教説を説く中観派」と「特定の立場を取る中観派」の二つに分類し、ナーガールジュナとアーリアデーヴァを gzhung phyi mo'i dbu ma pa「根本教説を説く中観派」と呼んでいる。なお、彼に先立ってイシェーデは gzhung phyi mo'i dbu ma pa という用語を「根本教説を説く中観論書」の意味で用いている。

カダム派のションヌ・チャンチュプは「特定の立場を取る中観派」について世俗と勝義の観点

から下位分類を行っているが、チョムデン・リクレルなどの他のカダム派の学者たちの分類はより単純になっている。さらに、チョムデン・リクレルはジュニャーナガルバを「世間極成行中観派」と位置付けるが、ゲルク派の学僧達は「経量行中観派」と位置付けるという違いも見られた。

自立論証派と帰謬論証派の相違について、ゲルク派はカダム派チョムデン・リクレルの「自立論証派は世俗を考察しない限りにおいて受け入れる」という説には従わず、その中観二派の違いを存在論すなわち思想的なものに求めるが、シャーキャ・チョクデンは修道論の視点から中観二派を分類する。

第 2 節「シャーキャ・チョクデンによる初期カダム派・ゲルク派批判」で明らかにしたように、シャーキャ・チョクデンによると、彼以前のチベットの軌範師達は、世俗の措定方法の点から中観派を [1]世俗を経量部と同じ論理で承認する経量行中観派（バーヴィヴェーカ、ジュニャーナガルバ）、[2]世俗を瑜伽行派と同じ論理で承認する瑜伽行中観派（シャーンタラクシタ、カマラシーラ）、[3]世俗を世間の常識に従って承認する世間極成行中観派（チャンドラ キールティ）の三つに分類する。しかし、シャーキャ・チョクデンは、世俗を論理によって考察せずに措定する点で全ての中観派論師達は共通の見解を持つことを根拠に、世俗の措定方法の視点から上の三つの中観派に区分するのは妥当でないと主張する。シャーキャ・チョクデン自身の見解によると、その三学派の相違は、所化を一切法無自性の真実の理解へと導く方法にある。

最初に経量部説を学ばせた後、中観説へと導くという方法を取るのが経量行中観派であり、最初に経量部説を学ばせ、次に唯識学説を学ばせ、最後に中観説へと導くという方法を取るのが瑜伽行中観派であり、中観派以外の学説体系を学習させずに、世間の常識から中観学説へと導くのが世間極成行中観派である。

第 2 章「シャーキャ・チョクデンにおける自立論証派の世俗観」　第 2 章では、自立論証派と帰謬論証派の区分に関するツォンカパとシャーキャ・チョクデンのそれぞれの見解を比較検討し、特に自立論証派の世俗観に関する両者の理解の相違点について考察した。

シャーキャ・チョクデンの見解によれば、ジュニャーナガルバとシャーンタラクシタは共に世俗として自相による成立を認めず、世俗を「考察しない限りにおいて受け入れられるべきもの」とみなす。一方、シャーキャ・チョクデンは、バーヴィヴェーカは言語習慣において自相による成立を認めるが、それは自説ではないと解釈する。これらの解釈は自立論証派と帰謬論証派の間に存在論的な区別を認めないことを示唆し、両派に存在論上の区別を認めるゲルク派の解釈との決定的な違いを示すものである。シャーキャ・チョクデンの解釈は、バーヴィヴェーカなど自立論証派の思想を実在論的と決めつけるゲルク派の伝統的理解に再考を促すものであった。

シャーキャ・チョクデンは、インド中観派の論師達の間に異なった世俗・勝義解釈があるとは考えない。彼が違いを認めるのは、所化を勝義諦の理解へと導く方法のみである。ここにゲルク派の論敵達による中観理解との大きな相違があった。

第 3 章「シャーキャ・チョクデンによる〈他からの生起〉の解釈」　第 3 章では、シャーキャ・

チョクデンによるバーヴィヴェーカへの再評価を中心に考察し、その思想史上の意義を明らかにした。

シャーキャ・チョクデンの考えでは、バーヴィヴェーカは、実有論者が認める〈他からの生起〉を世俗においても認めないが、それとは異なる〈他からの生起〉、すなわち自性によって成立しない〈他からの生起〉が世間の人々の言語習慣としてあることを認める。したがって、 彼の見解では、バーヴィヴェーカは自説として〈他からの生起〉を認めず、自性に基づかない〈他からの生起〉を世間の人々の観点から仮に承認しているのであり、この点において、チャンドラキールティとの相違はないということになる。

シャーキャ・チョクデンの解釈は、中観派の自説と世間の人々の考えを明確に区別するものである。自立論証派と帰謬論証派の間に存在論的な区別を認めないことを示唆し、両派に存在論上の区別を認めるゲルク派の解釈との決定的な違いを示すものであった。

第 4 章「シャーキャ・チョクデンによるゲルク派・チャパ中観解釈の批判」　第 4 章では、最初に自相の問題に着目し、ツォンカパ等のゲルク派の解釈と比較しながら、シャーキャ・チョクデンによる『入中論』6.34 の解釈を明らかにし、次に、シャーキャ・チョクデンによるチャパ中観解釈の批判に焦点を当て、中観派に主張があるか否かという議論の鍵となる「二重否定=肯定」の論理に対するサキャ派側の見解の特色を明らかにした。

第 1 節「ゲルク派による『入中論』6.34 の解釈」で明らかにしたように、「もし自相に基づくなら、自相を損減することによって事物を破壊することになる」という『入中論』6.34 における批判対象は、ゲルク派のツォンカパとケードゥプジェによれば、自立論証派でなければならない。その理由として、[1] 事物が自相によって成立すると認め、[2] 諸事物は実在として成立しないと認める学派でなければならないという二点を挙げている。そのような学派は自立論証派以外にはない。

第 2 節「サキャ派による『入中論』6.34 の解釈」で明らかにしたように、シャーキャ・チョクデンは、ナーガールジュナの中観思想を唯識的に解釈するラトナーカラシャーンティの説に立脚し、「遍計所執性なる事物は世俗においてすら存在しないが、依他起性なる事物は世俗において否定するべきではない」と主張する。なぜならば、シャーキャ・チョクデンによれば、依他起性なる事物は異なる実体である原因から起こる実体であることが知覚と推理のプラマーナによって確立するからである。それゆえ、ナーガールジュナが『根本中論』1.1 に説く「四辺生」の否定も、二諦いずれとしても存在しない遍計所執性なる事物に関連する批判であって、 依他起性なる事物に関連する批判ではない。

シャーキャ・チョクデンは唯識派と中観派の世俗観の間に決定的な相違を認めるが、中観派の内部で世俗観の相違があるとは考えない。このことも彼が『入中論』6.34 における批判対象を唯識派とみなす理由の一つであった。ツォンカパは、世俗の観点から「他からの生起」や「自相」を認める中観派が存在することを想定し、チャンドラーキルティが提示する三つの批判も自立論証派に投げ掛けたものであると理解する。それに対し、既に第 3 章で論じたように、シャーキャ・

チョクデンは「他からの生起」や「自相」を世俗において認める中観派は存在しないこと、自立論証派と帰謬論証派の間に思想的な相違は存在しないことを主張している。シャーキャ・チョクデンの解釈には一貫性があり、ツォンカパの『入中論』6.34 の解釈への再考を促す重要な視点を与えている。

第 3 節「シャーキャ・チョクデンによるチャパ中観解釈の批判」で明らかにしたように、シャーキャ・チョクデンの見解によれば、チャパとツォンカパの見解は、修行の途中段階において獲得されるものであり、中観派の最終見解において諸存在の実相は「自性の否定」と「無自性の肯定」のいずれの領域も超越したものであり、認識による把捉を超えた対象である。 シャーキャ・チョクデンは離辺中観説の視点からインド中観思想を解釈する。彼にとって中観派の勝義は「二重否定=肯定」の論理が及ばないものであり、認識の領域を離れたものである。

結論　このようにシャーキャ・チョクデンの批判は、チャパ・チューキセンゲ、ションヌ・チャンチュプ、チョムデン・リクレルなどのカダム派や、ツォンカパ、ケードゥプジェ、グンル・ギェルツェン・サンポなどのゲルク派に向けられる。シャーキャ・チョクデンはカダム派やゲルク派で考えられてきた伝統的な中観派分類法には従わず、修道論・教導方法という独自の視点から中観派を区分した上で、離辺中観説の見地から、全てのインド中観論師達に共通する世俗・勝義についての見解を導き出そうとしている。シャーキャ・チョクデン中観思想を貫くのは、断辺中観説の立場を超えて離辺中観説の境地へと向かう修道論である。